



建設一般50年史編集委員会編

## 『建設一般の50年』

建設一般の50年史である。建設一般は、その前身である全日自労の時代を含めて、わが国の労働組合運動のなかで、失業と半失業に対するたたかいにおいて、つねに問題提起をし、たたかいを切りひらいてきた。建設一般の50年は、わが国の雇用・失業問題の歴史的展開の過程であり、また、それに対するたたかいの歴史であるといえよう。その点では、今日の雇用・失業問題の深刻化のなかで本書から学ぶべきことは多い。

ところで、本書は、江口英一氏を責任者とする研究者グループと建設一般の3年にわたる共同作業の成果であり、本書の構成を見れば明瞭であるが、通常の組合史とは異なる研究書でもある。

ちなみに、本書の構成を紹介しておこう。本書は、「組合員の人々の思いは、そのまま私自身の思いに重なっている」とする江口英一氏の思いを込めた寄書き（『「建設一般＝全日自労」と私一序にかえて』）をうけて、「第1部 建設一般50年のあゆみ」と「第2部 建設一般の歴史的伝統」の2部構成で編集されている。「第2部 建設一般の歴史的伝統」には「戦後日本の社会階級階層構造」「失業・雇用をめぐる運動」「運動をつくったおふくろたちのたたかい」「建設一般の組織の特徴」「国際交流・国際連帯の伝統」「庶民最底辺層と文化」の6つの論考が用意され、戦後のわが国の労働組合運動において独自の領域をかたちづかった建設一般の運動の社会的背景と、そしてその活動と組織の特徴が整理されている。本書のハイライトにあたる部分である。

わが国の労働組合は、しばしば激烈な闘争に発展せざるをえなかった解雇反対闘争を別にすれば、雇用・失業保障を全国的統一闘争として取り組むという点で大きな弱さを示してきた。しかし、建設一般

は、まさにこの点でわが国の労働組合のなかでは抜きん出た存在感を示しつづけてきた。建設一般の歴史と、したがって本書に繰り返し登場する「失業と貧乏と戦争に反対する」運動は、現在もなお、雇用・失業に関する労働組合の活動のあり方と方向を示している。

本書の特徴は、先の構成からわかるように、建設一般がこうした歴史的伝統をどのようにつくりあげてきたかを、その組織の性格と要求、闘争形態など、多面的に解明されていることである。日雇い労働者の組合として、彼ら／彼女らの生活の安定と向上には、かかえる問題と要求を社会的なものとして提起することなしにはありえなかったこと、社会保障の確立を不可欠としたこと、またそのためには組合組織のあり方も企業別の組織形態ではなく、一般組合という組織形態をとらざるをえなかったことなど、建設一般の、そしてそれはまた日本の労働組合運動の今後のあり方にとっても教訓的であるのだが、重要な特質が明らかになる。

本書は600ページの大部である。だが、雇用・失業に関する闘争史として飽くことなく読むことができる。わが国の労働組合運動が直面する今日的課題に立ち向かううえで、ぜひとも読んでほしい1冊である。

(旬報社・1999年1月刊・18000円)

(丸谷肇・まるたに はじめ・会員・鹿児島経済大学)

佛教大学総合研究所編

## 『ジェンダーで社会政策をひらく』

何世紀もの間、性差にもとづいて経済的、社会的、政治的、軍事的役割が分離され、それが男女のあるべき資質や性格を異るものと定め、はては服装やしぐさ、言葉づかいまでも男女で異なるのが当たり前としたジェンダー社会に人間は生まれ育ってきた。人間にとって完全にジェンダーフリーであるのは容易ではない。しかし近代産業の発展が爛熟期に入った20世紀末に入って、ジェンダーによる社会システムを客観的、かつ批判的に見ることが、一部の人間の主張ではなく、はじめて多くの人々の主張になりはじめている。その一端を本書に見ることができる。